

合併号のいい訳

中島 秀之 会誌編集長／公立はこだて未来大学

今回は4, 5月合併号でお届けする。

編集委員会では昨年来、季節感のある特集をしようとう心がけている。たとえば8月号には夏休み^{☆1}に何かまとまったプログラミングをしようとする人のための特集を入れたり、1月号には正月らしい記事を入れたりするのである。

ところが、従来通りの(その月の15日)だと8月号はお盆頃、1月号は松が明けてからでないと思えない。やはりここは巷の月刊誌同様、その月の初めにはすでにお手許にあるようにしたい。

編集委員会で考えた可能性は3つ。(1) 1号飛ばすタイムワープ案、(2) 1年間に13冊出す時間加速案、(3) 合併号を出す時間停止案。

案(1)のタイムワープはワームホールが発見されないと難しい。現時点では残念ながらその報告は(少なくとも一般市民に対しては)ない。

案(2)は相対性理論によれば超高速で離れていけば時間を遅らせることが可能である。ちなみに静止している観測者(編集部)の時間の刻み幅を Δt_e とすると、運動体(読者)の時間の刻み Δt_r は、光速を c 、運動体の速さを v として、

$$\Delta t_r = \sqrt{1 - (v/c)^2} \Delta t_e$$

となるから、読者時間の進行を12/13に縮めるためには光速の39%に加速してやればよい。ただし、

^{☆1} 企業の人には夏休みは無縁かもしれないが、ご子息が高校や大学であれば、一緒にプログラミングという楽しみ方もあろう。大学院生や大学の先生方も夏休みは家にいるわけでもなく、講義がないだけであるが、その分研究に集中できる(しなければならない)期間である。余談であるが、世間の人たちは大学の先生は夏休みには大学を休んでいるものと思っているらしい。その期間に大学ヘタクシーで行ったりすると運転手さんから必ず「夏休みじゃないんですか?」と不思議な顔をされる。高校までと(あるいは唯野教授の勤めている文学部と)間違っただけらしい。

これは相対的なもので、編集部から見れば13号発行する間に読者時間が12カ月しか経たないように見えるが、読者から見れば13カ月の間に12号しか送られてこないことになる。よって案(2)も残念ながら却下。

案(3)の時間停止はさまざまな手段で実現可能である。相手がコンピュータなら、CPUを止めておけばよい。人間の場合でも人工冬眠という手がある。

というわけで、我々は合併号に踏み切ったという次第である。単に1号飛ばすという案(1)との差は、この合併号の厚さを見ていただければ了解いただけよう。本当に2号分を合併したのである。したがって、編集作業はこれ以降1カ月前倒しになって一部の執筆者にはご迷惑をおかけしていることと思う。全読者を冬眠させるわけにはいかなかったのも、我々が睡眠時間を割いて早く動くしかなかったのである。

P.S. この原稿を用意した直後に1000年に1回と言われる大地震が起きた。一瞬「日本沈没」かと思ったほどである。4日後の現時点でも被害の全貌は明らかになっていないが阪神淡路大震災の被害を大幅に上回っているのは間違いあるまい。亡くなられた方のご冥福と被害に遭われた方や家屋の一刻も早い復旧を祈りたいが、インフラ等の復旧は長期化しそうだ。実は情報処理学会事務局も被害に遭っていて、この合併号の原稿を格納したマシンのHDが読めなくなってしまった。幸いバックアップからの復旧ができたので、皆様にお届けできる次第である。